

わが愛する歌 ―名歌鑑賞―

二反田 實

(前略) 冬^{ふゆ}こもり 日に日に雪^{ゆき}の 降^ふるなべに 往^ゆき来^きの道^{みち}の あとも
絶^たえ ふるさと人^{ひと}の 音^{おと}もなし (後略) (仮名は全集のままに)

定本 良寛全集第二卷 (中央公論社二〇〇六年刊) 所収

「はちすの露 本篇(九四首)」の中にある四八四番歌で長歌の一部分。この稿を書いている今は寒中的一天中寒さと雪の中で、静けさは頭の芯がいたくなるかと思う程です。唯、柱時計の音が狭い家に三つもあるので、それらが重なりあって生きている時間を減じ去ります。

良寛の色々の歌に旅はあったと思われませんが、やはり「万葉集」に帰って来たことを示す歌の一つかとも思われます。今日やさしさの標本のように受け取られている良寛は、決してなまあたか現代の「やさしさ」などとは全く無縁の遠い人であることを、私はこの歌に感じます。

良寛の「やさしさ」は、山のやさしさ、海のやさしさ、川のやさしさ、つまり自然の、「おのずからしからしむ」ことの「やさしさ」を身に付けた人物として完成しているのであって、良寛の「与」えるやさしさでは決していないことを、私は知るので。良寛にとって、全くの悲しみも、全ての喜びも「自然(じねん)」としてのやさしさの中に宿っているのであって、良寛自身がやさしいのではなくそれを知る人として詠っていると思うのです。

卷頭言

長谷川等伯没後四〇〇年特別展が上野の国立博物館で開催された。国宝三件、重文約三〇件を一挙公開という触れ込みに、長蛇の列、その人垣を縫って覽てきた。

等伯は能登に生まれ、養祖父、義父に繪の手ほどきをうけ、信春と名乗り、繪仏師となる。三十三歳のころ上洛し、狩野派一門の牙城に迫り五一歳にして千利休の後押しもあり大徳寺三門の金毛閣の天井画を描く。五十二歳で永徳と御所の障壁画を争い、のちに祥雲寺の障壁画を制作。六十一歳のとき一族への祈りをこめ、よき理解者であった日通上人に「大涅槃図」を寄進する。波乱万丈の生涯だった。

国宝「楓図壁貼付」を始め重文「三十番神図」「日堯上人図」「利休図」など心惹かれる繪に多く逢ったが、溜息が出たのは「松林図屏風」であつた。濃き薄き松の朧が近く遠く心を捉える。手前の濃い松の木の松葉が以外に力強く、と言うより乱暴とも言えるタッチなのに驚かされた。ふるさと能登七尾の海岸の松を描いたものという。

朧に濃き薄き松が洵に強く浮き出してくるのをじっと覽ているうち、その余白の大きさが迫ってきた。この空白は一体何だろう。不意を突かれた。このしろい空白。何も語らずに凡てを語る。そういえば松尾芭蕉も「謂心せて何か有」といつていた。表現の奥底はすべてを「いいおおせない」ことである。余情（匂い）は表現過剰からは生じないことを改めて識らされた「松林図屏風」だった。

（松岡）

太陽の舟 目次

三十二巻 五月号（通巻三〇五号）

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫 1

二十五首詠

永野 昌子 2

阿部正路論（第一〇三回）

須藤 宏明 4

歌誌散見（第七十九回）

豊泉 豪 5

作品Ⅰ

佐伯 朋子 他 6

三月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子 16

（作品Ⅱ）

富永 道子 17

合 評（座談会）

角田 順子・土方 澄江 20

選者十首

酒向 一次・渡辺 幸子 21

秀歌抜芳（三〇三号）

高崎 邦彦 22

作品Ⅱ

森田 勝昭 他 26

文法講座（十七）

奥田 清 35

作歌の目・作歌の技法（第六十四回）

三木 勝 34

全国大会ご案内

36

歌会・支部報告 他

37

編集後記

山田（紀）・富原・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

箱根山吟詠

永野昌子

暮れゆくは丹沢大山箱根山尾根遠近の我視野に立つ

相模灘波静かにも暮るる日の箱根連山筋雲の中

箱根山三浦半島暮れゆきて波荒々し風立ちており

夕映えに箱根の山も輝きて宵の明星^{ひかり}と光る

日は沈みしばらくつづく残照のくつきりと見ゆ二子山なり

我祈り箱根の山に心して手を合わせむと一日^{ひとひ}の終りに

箱根山遠くうっすら見ゆる日の空は煙りて富士は何処に

遠けきは伊東より船の群れなして朝漁に燃えて帰りゆく船

明神と明星ヶ岳生きませし今日もうっすら薄雲模様

故郷は七国峠富士清くハウスミカンの大磯丘陵

怨^{おん}靈^{りよう}の泣き野ヶ原で夫を待つ新妻哀れ悲劇の川止め

夫と妻怨靈哀れや糸切れて幾年か経ち地藏の姿に

地藏尊の姿となりて人々の哀しさ誘い百有余年

土砂降りの雨は上りて入日射し今年の稲作やや不良なり

何もかも憂いて空し空^{うつせみ}蟬の影に落ちなむ旅思う時

神佛はいませしと前に進みおり手を合はせしを読経は響く

暁^{ぎよう}光^{こう}を破りて高き読経の声朗々と谷間に響く

現身^{うつせみ}のこの世に生を受けしより苦惱^{しやく}死^し厄^{やく}は満ち溢れいし

我も又悪業の中に生れ来て口聞けぬ子をサポートする

苦悩より逃れんとして経を読む菩薩の道は遙に険し

苦悩ゆえ引きこもりがちな我なれば立て目覚めよと言ひて眠りぬ

強き意志深き心に誓ひつついつもの道をすたすた歩く

箱根山何^い時^つ暮るるとも知らずして遠く見えしは伊豆の白波

山ありて海ありて富士の輝きて一陣の風吹くみかんの山路

夕雲の匂える箱根の山の彼方今日もまっかな夕陽沈みぬ

阿部正路論

須藤 宏明

―プロレタリア短歌と百姓の短歌―

大正末から昭和初年代にかけて、プロレタリア文学の台頭と高揚にともない、歌壇にもプロレタリア短歌と称される短歌群の気運が高まった。昭和三年に創立大会が持たれた新興歌人連盟の理念として、阿部正路は「第一に革新運動の戦線統一、第二に宗匠主義の打破、第三に内容形式の矛盾の揚棄、そして第四に執拗なる自己批判の展開」（『短歌史』楓桜社・昭和五十六年・一六六頁）をあげている。また、阿部は、同年に組織された無産者歌人連盟の「短歌戦線」に対しては、創刊号に書かれた「階級闘争の先端に立って大衆に叫びかけるもっとも先鋭的武器は短歌形式において他にない」（前掲）という坪野哲久の言を重要視している。このような革新的な運動や、大衆の側に立った短歌の視点は、近代短歌の流れに大きな影響を与え、これ以後多大なる力を有していったのだが、阿部は、これらのプロレタリア短歌の動きに対して、
思えば、近代短歌は、もともと、プロレタリアートの自

覚の上に自立するものではなかった。（前掲・一六九頁）
とやや批判的な言説をおこなっている。或いは、坪野哲久と石搏（五島）茂との、五島がプロレタリア短歌から身を退くといった行動に対する、賛否論争に対して、

石搏（五島）茂の〈奇怪な行動〉は、なおさまざまな議論をよんでゆく。それは彼個人の問題としてではなく、昭和初期のプロレタリア短歌運動の含む矛盾として更に検討しなおさなければならない。（前掲・一七一頁）

と、これも、プロレタリア短歌の持つ矛盾を取り上げて、距離を置いた見方をしている。阿部は、なぜ、このような批判、懐疑、再検討の要を提言しているのか。それは、短歌によって社会を変えることはできない、短歌の本質は社会を変えることにあるのではなく、個人の心情を素直に表すことに短歌の根幹があるという考えに基づいているからではないだろうか。それは、平田松堂の『百姓の短歌』という歌集に対する、阿部の評言に如実に示されている。平田は、もと伯爵で東京美術学校の教授を務め、戦後は那須で農耕生活をし、百姓になりきって歌を作った人物である。

平田さんにとっても『百姓の短歌』の作り手であった日々が何も増して幸福であり、その日々が人生の中でもっとも輝いていた日々だったといえるのではないでしょう。か。（『新・短歌への招待』日貿出版社・一九七四年・二頁）
と、阿部は記している。労働の苦を歌うのではなく、土に親しみ、土を耕す喜びを歌うことを、阿部は重視している。

歌誌散見 第七十九回

豊 泉 豪

「ふいめえる」③

前号に続き、「ふいめえる」三九号（〇九年五月）、四〇号（十一月）より、短歌作品を鑑賞する。

・ふりむきて朱雀門追うわが視界イトーヨーカ堂ビルがさえる
小沼青心

「朱雀門」は平城宮跡に近年復元された広大な門である。そこを立ち去る名残惜しさに、あるいは一目見ようと振り返った作者の視線を、「イトーヨーカ堂」がさえぎった。この看板の巨大なスーパールのビルは、全国にある画一的な建物の象徴である。固有名詞を出したことで一首が観念的にならずに成功した。ただ、第二、第三句での格助詞「を」の省略により、歌のリズムが停滞してしまったようにも思われる。

・謂れ多分あるのだらうネクタイの斜め縞なべて右へながる
野口敏子

あってもなくてもかまわず、知っていても何ほどの役にも立たない知識というものがあり、そうした知識を得ることの喜びがある。純粹な知的好奇心とでも言おうか。逆に言えば、細部に潜む極めて小さな不思議や疑問に気が付くことにも一種の喜びが伴い、それはやはり発見することの喜びだと言えるだろう。そうした感覚と詩歌とは、非常に相性がよいので

はないかと、この作を読んで改めて思った。

・いただきし蟹缶ありてにんまりと清酒（久保田）の顕つたべなり
福島美恵子

うまい特別な酒は、うまい特別なつまみで呑みたいものである。出番を得ず隠れていた清酒（久保田）が、蟹の缶詰というベストパートナーを得て、満を持して登場した。「にんまりと」したのは作者か、あるいは酒を酌み交わす相手か、ひょっとしたら清酒（久保田）か。いずれにしても（我が意を得たり）といった声が聞こえてくるようで楽しい。「蟹缶」によって滲み出た微妙な生活感に共感を持った。

・子とともに三者面談の親の席 座りるしわれがふいに懐かし
深井雅子

実母の死を歌った一連の一首である。葬儀のために子ども（故人の孫が集まった。作者は娘として母を偲び、また母として子らを見つめる。この作の前に「思ひ出はわれのものにて分かち合ふこと叶わざる 若き日の母」があり、誰とも分かち合えない母の思い出があることを歌う。思いは自ずから若き日の自分に向かい、子どもにとって不可欠な存在である親としてのわが身を懐かしむ。上の句がやや言葉足らずでこちない表現に思われるが、心情は伝わってくる。

「ふいめえる」に参加する同人は、土地（茨城在住）と性別（女性）に限定があるが、誌面からはあまりそうした印象を受けない。自由で伸びやかな雰囲気を感じる同人誌である。

（「ふいめえる」の項、了）

三月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子

・晴れた日は帰れなくなってしまうたし路地裏通りへふらりと入りぬ
熊谷 香織

何かをしつかりと掴んでいたいのが、それが何なのか、どのようにしてと、青春の日々の心の揺らぎが表現されています。遠い日、訳もなくふらりと江の島へ出かけて行った日の記憶が、私の中に今も鮮明に残っています。

・羽裏白き小鳥いっせいに空に散り皆々冬の光となりぬ

小林 絢子

電線や木々に留っていた小鳥達がいっせいに飛び立つ時大きな羽音をたて青空に吸い込まれるように飛んで行きます。中には「おや、羽裏はあんなに白い」と思うものもあります。「冬の光となりぬ」という表現が美しいと思いました。

・今更に何にたぢろぐ八十過ぎし生きの身ただに古りゆく吾れは
志賀 倭子

満州からの引揚げなど多くの苦難を乗り越えてきた作者であっても、「老い」にたじろいで居られます。それほど受けとめ難きものとして、「然らば生きなむ」と心して生きていきたいと思いました。

・「つるぎさん」と濁音で呼ぶ古き友亡夫の故郷の金沢の人

鶴来けい子

当時は、濁音で呼ばれることが気になっていた呼び方、そ

れがかえって夫の生きていた頃を懐かしく思い出させます。

・耐え合ひし夫との日々遠くなり笑みの動かぬ遺影責むる
・ひたぶるに夫恋ひまよふわが翼たたみて朝の光に順ふ

富永 道子

辛いことは、共に耐え合って来たのに、今はこの辛さを一人で耐えています。何処へあてつけることもできない責める気持を、次の歌で「わが翼たたみて朝の光に順ふ」と心鎮めて居られます。朝の光に感謝する外はありません。

・年ふれど往きたる人よ帰りませめて夜伽の冬のいろりよ

二反田 實

「火」というものは、人の心を集めるものなのでしょう。辺りは暗いのに、そこだけ明るいいろりの火が見えてきます。夜通しいろりの火を見つめて往きたる人々と対話する作者。家を守ることの重みを感じました。

・墓参終へ蜜柑山に佇ち眺むればしまなみの海ひかり耀く

松岡 三夫

ふるさとに帰ると、空気も光も大地も自分を包みこんでくれるような気がします。しまなみの海が光って作者を迎えてくれました。作者の感動が伝わってきます。

・雨霽れてにわか温む鎌倉路遅きもみじの照り葉つらつら

松本 昭子

作者は鎌倉が好きでよく行かれると言います。雨が上って濡れたもみじの葉が連なって、陽の光を浴びています。つらつらが、歌の調子に変化とリズムを与えています。

三月批評（作品Ⅱ）

富永 道子

・久びさに縫ひ針持てば節くれの目立つ両手に布は添ひくる

山田 紀子

お手製の衣服で歌会出席なさる器用な作者、器用さゆえに、布の方から両手に添てくると、仕上りへの喜びや、針仕事への励みとして表現。油をさしてのミシンへの語りかけも優しさの視線でたしかめている。

・多羅葉を石山寺より持ち帰り爪楊枝にて吾名を書きぬ

吉岡悠紀子

深い探究心で、ネットを使いこなしておいで作者、歌会で、当日の歌にある難解な植物や事柄、場所などの資料を回覧させて下さるので、勉強させていただけます。自作の地図をお供に、意義深い楽しい旅をお続けですね。

・一度は得たりし死を待つ平静も錆びつきいざには役に立た

ずかも

生稻 進

同じような思いを一昨年体験しました。麻酔から醒めて、「生きるしかない」と、悟り決ったつもりでも、死に迫られた時は、目も当てられないほどに取り乱し、狼狽えるのかも。「懸ける迷惑が少ないように」活きます。

・厨にて白菜きざむも弾み居り集いし家族の声を聞きつつ

上田やい子

採り立ての白菜は、包丁の刃が入ると自分でパリッとほじけます。聞えてくる団欒の声に、妻として母として主婦として、

満たされた幸せを感じながら、リズム良く白菜をきざんでいる。その笑顔までも見えるようです。

・障子張り朝持ち去りて夕日ころ白くまぶしき美しさとなる

岡崎 くに

夕方まで、障子は職人の仕事場へ運ばれて、部屋は広くなったように感じます。ガンバッテいた敷居もほっとして長くなったかと思うほど。でも何か淋しく寒く心許無い。眩しいほど真白になって戻った障子は、安堵と嬉しさと活気をくれて新しい年の希望へとつながる。

・エレベーター乗り合ふ十人三所帯量感なして階昇るなり

奥田 清

四角四面のエレベーターに乗っているのは家族だけ、年越しをホテルでと計画してくれた家族の十人だけ、何と和やかな幸せなご一家でしょう。貸し切りエレベーターには他人は乗れない。もっとゆっくり昇って欲しい。そんな羨しい様子が見えます。

・地にとざす時の流れを尚おほふ雪の原ゆく獣のありし

石塚 立子

地中や地表のうごめきや、時間の流れまでも、厚く覆い隠してしまつた雪。でもそこに、獣の足跡はある。ダイヤモンドラストも生き物のように空を転回している。獵師もどこかに棲んでいる。森には樹々の叫びもある。そして、土器や黒曜石の埋もれる斜面も、目や耳で触れることが出来なくても、小さなうごめきが、地球、宇宙を動かしている。

合評

座談会

司会 今月は三月号から四首を選んで合評を行います。一首目は、大磯支部の杉山直子会員の

公園の強きライトに照らされて何を急ぐか風舞ふ紅葉です。Iさん如何でしょうか。

I 先ず、「何を急ぐか」は出来るだけ避けた方が良し、「風舞ふ紅葉」は「風に舞ふ紅葉」か「風が舞ふ紅葉」かでしょうが、やはりおかしいです。

S 私と同じです。一番気になるのが結句です。それと「何を急ぐか」ですね。「何を急ぐか」を「急きて」に変えて、「公園の強きライトに照らされし紅葉は急きて風に舞ひ散る」と私は勝手に直してみました。

T そうね。風に舞い散る紅葉がどういうふうなのか、を表現すると良いです。「何を急ぐか」は取り、「風舞ふ」は縮めないで「風に舞ふ」とした方が良いでしょう。

Y 作者は、強いライトに照らされた紅葉を詠みたいのか、風に舞い散る紅葉を詠みたいのか、作者の詠みたい焦点がバラバラな感じを受けます。

T 秋に散る筈の紅葉が、強いライトに照らされて赤くならないうちに散ってしまっている、という歌なので、「強きライト」が紅葉の季節感を狂わせてしまった、と作者は紅葉の哀れさを詠いたかったのだと思う。だから例えば、「公園の強きライトに照らされて風に舞散る青きもみぢ葉」というふうに直したいですね。

S 紅葉というと、つい赤い葉を連想してしまいましたけど可哀相に青いもみぢ葉は季節が狂ってしまったんですね。

Y それならばこの歌の場合、漢字の「紅葉」ではなくて平仮名のほうが良いということですね。

I 平仮名のほうが感動が伝わってきます。

司会 では、次は柏支部の角田順子会員の

ひととせに伸びしセージの枝を切り春を迎ふる庭ととのえるです。どなたからでもどうぞ。

S セージはサルビアのことですね。香辛料としてソーセージに入れたりしますよね。私は短歌的にはサルビアという名前のほうがふさわしいと思いますね。

T サルビアよりセージの名前の方がステキな感じがする。

S 作者は旧かなを使っているようなので、五句目の「え」を「へ」にしたほうが良いですね。

T 表記も旧かなに統一した方が良いでしょう。それから、「ひととせに伸びし」は「ひととせを伸びし」に直します。それで「を」が三つになるので、三句目の「を」は省略します。「ひととせを伸びしセージの枝切りて春を迎ふる庭ととのへる」に直してみました。

Y 気持の良い歌だけれど、一寸、物足りないナ、という感じがしましたが、こうして直したら歌が整ってきて良くなりましたね。

I そうですか。私は、この歌は直しても全体的に物足りない感じがします。

T 表現の上手い下手ということよりも、この歌の落ち着きが良いですね。

Y 素直で好感のもてる歌ですね。

T 春を迎える準備は色々な形があるけれど、「庭ととのえる」という歌に作者の気持や時間の余裕が感じられます。

司会 三首目は、千葉支部の富原澄枝会員の

静もれる秘湯の宿の頭上にはひととはけの白 上弦の月
を取り上げます。如何でしょうか。

Y 「ひととはけの白」とは、「上弦の月」のことを言っているのか、それとも雲のことなのか、よく解らないです。それに一字明けもあるので、よく考えなければならぬ歌です。

S 「宿の頭上に上弦の月」という表現もおかしいです。

Y これは露天風呂に入っている作者の頭上、ということではないかしら。

T その所の所は、「秘湯の宿の空高く」ぐらいにすれば良いと思う。問題は「ひととはけの白」と「上弦の月」とがイコールなのかどうかです。上弦の月は半月で早くに出て真夜中に沈んで行く月のことなので、「ひと刷毛」だったら、三日月や細いもの、薄いものを表現するので上弦の月には合わないような感じがどうしてもしますね。

I 上弦の月は昼間でも見えることがありますか。

T 昼間でも見えますよ。

I じゃあ、昼間の上弦の月を詠んだと解釈できますね。

T それは「ひととはけの白」があるので、やっぱりまわりが暗い夜のことでしょう。

I 「ひととはけの白」と「上弦の月」とは別のものだとして解釈した方がいいですね。

T 「ひととはけの白」というと、雲の方がふさわしいね。上弦の月がひととはけの雲を照らしているというふうにも解釈できるし、一寸、解り難いところのある歌ですが「静もれる秘湯の夜の空高くひととはけの白 上弦の月」としてみました。
S 「宿」も「頭上」も取って、「夜」の一字を加えるだけで

随分、歌の雰囲気が変わりましたね。

司会 四首目は、水戸支部の岩橋千代子会員の
生きているたのしさみせて濠の面に三寸ほどの子亀の泳ぎ
です。如何でしょうか。

S 私は「生きている」の「ある」が気になりましたね。

T 「ある」は、今では動かないものにしか使わなくなっているけど、昔は生きているものを含めて小動物全部に使っていたものですから間違いではないです。

S そうですか。「ある」を漢字にすると「在」と「有」とがありますけど、この歌ではどちらが良いでしょうか。

T この歌では平仮名の方が良いですね。「ある」は現代の感覚で言えば「本来、生きている」の意味ですから。

Y 私は「ある」は気になりませんでした、「生きている」たのしさみせて」がわかりづらかったです。

I 具体的に言えば、泳いでいる、動いている、ということですよ。

T そうです。おもしろい表現だと思う。

S 子亀の生きている喜びみたいなのが読み取れます。

T 「濠の面に」の場合には、結句は「子亀泳ぎぬ」とした方がいしいし、「濠の面を」とした場合では、結句は「子亀の泳ぐ」にしたいです。格助詞の「に」と「を」の違いで、結句も少し違ってきます。

S 結句を連用形が名詞化した「泳ぎ」で止めないで「泳ぐ」と終止形にした方が良いでしょう。

Y 「濠の面を」のほうが動きが感じられますね。
司会 本日はこれで終わります。ありがとうございました。

(記録 山田紀子)

選者 角田 順子

新春を屠蘇に祝ひし四世代 亡夫が叶はぬ幸ひとり占め

山田 鶴子

聞きたきを黙してきかず大根をすばと切れば水のおふれる

山名 恒子

老老介護夫の介護を持て余す腑甲斐の無さをひとり悲しむ

相羽 照代

ひとときの賑はひのこし娘等帰るこの寂しさもなれて十年

江面 伸子

故郷が頭で見ゆると妻の言う病の幕間の束の間のこと

君塚 一雄

☆ヒロシマの炎のさまを投げつけし画布には天の怒りを表わす

木村 恵美子

生き行かむ哀しみに似て冷ゆる朝冬薔薇は小さき蕾つけた

木村百合子

忙しさ故に子供の声聞けずそと心に詫びる日もあり

高橋 和子

鮮烈な炎哀しき原爆図平山画伯の傷み沁みくる

松木 昭子

☆布ひろげ思ひ通りに裁断すストレスひとつ斬って捨てたり

山田 紀子

選者 土方 澄江

アドレス帳朱線を引きて一人消す書き加へたし新しき名を

小貫 昭

燃ゆる緋もて元気をくれしサルビアの今朝霜に果つ土へ還らむ

佐伯 朋子

豆台風つぎつぎと来て去りし部屋紙ひこうきが五つ不時着

玉川 愛子

透き通る風にはらりと散る銀杏掌に受けとめて秋を逝かしむ

塚本 正子

言い伝ういのちの泉尋ねれば外つ国^{くわに}人も水を汲みおり

梶野 落

気がつけば脈打つこと星の数老いても続くいのちの神秘

丸山孝一郎

白粉ふく干柿縄より外しつ皮むき競いし祖母母遙か

村田 孝子

☆布ひろげ思ひ通りに裁断すストレスひとつ斬って捨てたり

山田 紀子

美しきことだま歌に鎮もれと言葉探しに闇を流離ふ

緒方 善丸

柚子の香の著く匂ひる湯に浸りこの一年の来し方を問ふ

木村 重夫

選者 酒向 一次

去る者は追ふまい されどうら悲し友の賀状のなげに途絶
へし 小貫 昭

☆ふるさとの古き家並に月皓く少女の日々よモノクロに顕つ

佐伯 朋子

冬日さす玻璃戸をふきて煤逃げの夫の留守のコーヒーの味

鈴木 薫子

母寝てるすき間を縫って「伊東の日」百十円也の名所を巡

杉本 和子

紅葉は喜びの色か風に乗りにかえり来て木々を支へる

武田 節子

ふるさとの蜜柑山訪ふ老い二人しづかに登る手を取りあい

松岡 三夫

て 一、二滴ミシン油を差しゆきぬ軽きリズムに耳かたむける

山田 紀子

零戦は一人座席の死の旅と飛び立つ若人涙こらえて

飯塚 裕子

小康を授かりし妻の安らかな寝顔はすでに菩薩にも似て

君塚 一雄

☆ヒロシマの炎のさまを投げつけし画布には天の怒りを表は

す 木村恵美子

選者 渡辺 幸子

簡潔な手紙に添えらる押花にはつきりと識る君の琴線

よしだゆきお

晴れた日は帰れなくなってしまひたし路地裏通りへふらり

と入りぬ 熊谷 香織

☆ふるさとの古き家並に月皓く少女の日々よモノクロに顕つ

佐伯 朋子

冬枯れの木の清清し青空に伸びるように己を晒す

武田 節子

待ち侘びて出て来し初日のたふとしに声もなくして手を合

わせたり 照山 好子

若者のことは勝手に変りゆく文法を超へ広辞苑を超へ

長須 正文

はるばると南アルプス越ゆ吹雪寸又峽に光る風花

宮島マツエ

賀状には今年も牛歩としたためて猛虎うらやむ己もありぬ

山名 恒子

立ち竦む焰と見紛ふ夕焼けは誰の仕業よ富士の背燃ゆる

浅見 時子

歌は人そのものなれば技の共美に懂るる心磨かな

緒方 善丸

ふるさとの幽谷に咲きし白梅を識るは吾のみ果無く散れり
よしだゆきお

故郷を心の奥深くに秘めながら、多くの人々は都会で生きて来た。年を経れば経る程に私達は犀星の「ふるさととは遠きにありて思ふもの」を口遊みながら望郷の念に耐えて来た。その想いの中核にあるのは父母であり、自然ではあるが、未熟であるがゆえに未完成に終わらざるを得なかった初恋も又深く深く故郷と結び付いて心の奥底に埋火となつて残っている。しかしそれを生涯心の奥底に秘めて誰に語る事無く人は生を終える。巻頭二十五首はそんな多くの人々の心に秘めた琴線を言葉に成し得た稀有の人と言つて良いのではあるまいか。最初の十首程は昭和三十年代後半の青春映画の趣きではあったが、「梅咲きて遅き賀状の手紙届く病床にてと乱れ文字哀し」から様相は一変する。作者しか知らぬ、作者しか語れぬ青春がそこにあった。先に、多くの人はそれを語らずに生を終えたと書いた。それは、完結し得ないままに、自分も年老い、相手も年老い共に人生の垢を背負つて生きていることを知ってしまうからである。したがつてこの恋の完結は美しいままの相手の死によつてしか完結し得ない。「不思議なり幼き友の君逝きて故郷の山河他国に思えり」実感で

あろう。そうして掉尾の抜芳歌が生まれた。悲しみは故郷の山河と共に昇華し、美しき心の温とみは故郷の父母と一体化した。多くの未完で終わった初恋を抱いて生きる人々に比して、最も幸せな人と言えるのではあるまいか。

二〇〇九年を表す漢字「新」と決まる「政権交代」「新インフルエンザ」
久保田美智子

毎年十二月十二日に京都の清水寺の貫主が、その一年の世相を表わす漢字を発表する。漢字能力検定協会が公募して最も応募数の多かった漢字を清水寺の貫主が発表するのだと言う。二〇〇九年は「新」だった。あれから四ヶ月余、「新」はもうその面影を失った。「政権交代」も「新インフル」もはや過去のもの。抜芳歌を読むにつけ、「新」を維持する事の困難さと、人間の弱さを痛感する。温かくかほそき吐息わが孫の可憐な眠りを胸に抱きしむ

小 貴 昭

私も昨年七月二人目の女孫を授かった。その喜びと幸福感は理屈ではない。正しく本能に根差したものであるとつくづく実感する。生き物は全て本能で種を守り続けて来た。しかし身に寸鉄も帯びぬ人間にのみ二世代三世代を慈しむ本能が付与されているのかとすら思う程孫はかわいい。私には、抜芳歌の一字一句が胸に沁み、その状況の細部に渡つてまで

前々号 (303 号) 秀歌拔芳

が思い浮かび幸せな気持を共有する。

アフガンに軍隊増派を命じしは平和の賞を得し大統領

佐田 孝義

つい最近沖縄返還交渉の密約が明らかとなり、佐藤首相のノーベル平和賞に疑問符が付いた。その時の特使若林敬は、郷里に隠棲するも沖縄の現状に憤り、密約を公にした後責任を取って自殺した。佐藤家からノーベル平和賞が返還されたとは聞いていない。真の平和とは戦争をしない事。方法はいくらもあったであろうに。オバマも国内利益団体に負けたか。私も作者同様、戦争の無い世界、戦争を指示しない政治家を真に尊敬したい。

四時半の晩鐘の音が響きたる沈む夕陽は山の端の影

善波 一江

「山の端」とは「山を遠くから眺めた時の稜線。またそのすぐ下の部分」を言う。枕草子に「秋は夕ぐれ夕日の差して山の端いと近うなりたるに」とある。拔芳歌、入相の鐘の音が聞こえる夕方、夕日はもう沈んで山の端に隠れてしまったと言う。何と静かで美しい日本の夕暮れである事か。ただ淡淡と事柄を述べつつ、内包する静けさとそがれてゆく時の移ろいが晩鐘の音に乗って伝わって来る。

老い夫を看取れる日々の在る幸と歌友の文にふかくう

なづく

月田 藤枝

私達は決して一人ではない。家族を超えて歌で結ばれた絆を大切にする集団でありたいいつも思う。それでも人はその孤独を払拭出来ないかもしれない。しかし、私は一人でも二人でも仲間に加われ仲間を助けるそんな集団でありたいと思う。拔芳歌、作者の苦しみを知っているだけに作者を助ける歌友が近くに居る事をうれしく思う。そしてそれを感じ取る心の柔軟さが作者にある事を真実うれしく思う。

浪高く空荒るる日をえらび寄る弱きハタハタの意を肯へる

土橋 茂徳

同じ日本海沿岸でありながら、能登ではハタハタは捕れない。秋田八森は日本で最も有名。私は阿部先生のお宅で始めてぶりこを抱いた大きなハタハタの焼き魚を食べさせて戴いた。そのおいしかった事を今も忘れる事が出来ない。あるいは作者が先生に贈ったのを食べさせてもらったのか。その時先生は「海がハタハタの精子で真白になる。それを捕りに荒海に出た漁師が沢山死んだ」と悲しそうにおっしゃった。今その弱きハタハタを人間が育てている。拔芳歌を含む七首。先生の思い出と共に深く心に沁みた。

粉々と初冬の雪は音もなく皁なでるごと衣きせるごと

二反田 實

「冬は来たれり」七首、奥飛驒の冬の冷気が津津とこの身に纏わり付く。新月に向かう三日前の細月が寒い朝に残り、細かい雪が根雪になる前に周囲を白く染める。それを「畠なでるごと」と野を歌い「衣きせるごと」と家や木や石の白さを歌う。そして長き夜をいろりの前で魂呼びをする。私たち雪国の人々が静かに冬を籠り、先祖と自然と対話して生きた、そんな昔の雪国の人々を彷彿として心が清くなる思いに駆られた。

おせち作る大つごもりの厨辺に柚子の香りの甘くのこれる

深谷 幸子

今自分に出来ること、その事を精一杯、全力で果たして来た作者の生き生きとした気迫が結句に生きている。最近おせち料理もパッケージになった。手作りの料理を作る作者もそれを食べる家族も皆人間が人間として生きている最も幸せな行為。ならば今、作者の自分に出来る事とは、そして家族が皆幸せになれる事とは。答えは明白。家族の為に料理を作り、自分の為に歌を詠む事。それは私達全ての幸せでもある。

鮮烈な炎哀しき原爆図平山画伯の傷み沁みくる

松本 昭子

平山郁夫は昨年十二月一日に亡くなった。シルク

ロードをテーマに沢山の画業を成した。自らが被爆し、白血球の減少により死も覚悟したが仏教の世界に救われたと言う。そんな中、一九七九年自らの被爆体験を踏まえた〈広島生変図〉は見る者の心を揺さ振らずにはおかない。この地球上で人類が犯した最も醜悪な犯罪は原爆投下だ。せめてもの救いはあれ以降一度も使われなかった事。この原爆図もその抑止に大きな力となったに違いない。

親孝行した覚え無く終の日を後悔しつつ受け入れにけり

森本 元昭

その方は義母、介護施設に十年、米寿で亡くなられたと言う。親孝行とは無尽蔵。尽くしても尽くしてもこれで良いと言う事は無い。一緒に居て介護してやれない理由も数限りない。私は二親を見送った。生きる事に精一杯、親子が一緒に住めない貧しい土地柄。私達親子共々に両親共、抜芳歌の様な感慨があったか、改めて考えさせられると同時に、作者の言い知れぬ心のやさしさと暖かさを感じた。

宇宙の中小さき国の日本に生き越し百年早や四年過ぐ

渥美 崇子

この作者程「宇宙」などと言うとてつも無く大きな言葉を使ってピッタリ嵌る人は居ない。作者は日本などと言う小さな世界の住人では無い。正に宇宙の住人。私は作者の百四歳に畏敬と称賛を

前々号 (303 号) 秀歌拔芳

惜しまない。「元旦は清涼にして新年の祝宴かこむ長男夫婦と」きつと、この長男夫婦も御高齢に違いない。大自然（武者小路は神とは言わない）に愛されて特別に生かされて来た作者の幸福を共に喜びたい。

半蔵濠に羽根休めいる水鳥の影を残して夕日沈みぬ

飯塚 裕子

私の結婚式場は半蔵門会館だった。阿部先生が手配して下さった。東京で最も皇居がきれいに見える場所と言われ、部屋から半蔵門、濠が良く見えた。今その会館はグランドアーク半蔵門。昔日の面影は無い。しかし、皇居の半蔵門と濠は変わる事が無い。ここ来ると変わらざるものの尊さを感じる。その濠に水鳥が羽根を休め、その影を残して夕日が沈む。残像のほんの瞬間の美を見事に描いた。

沁み氷る樹々さける音ひびく森どこかに獣は耳をそばだつ

石塚 立子

一読それ程の凄みは感じられなかったが読み込んで行く内にその秘めたる世界に引きずり込まれてしまった。樹々を流れる水が氷って膨張し、その樹木がさける音がすると言う。私は聞いた事は無いが極寒の地では起こり得るのであろう。そんな極寒の地にも生物は潜み隙をうかがう。それはあたかも弱い自分自身の心の有り様でもあり、社会の闇を暗示してはいまいか。自然を描いて自然

を超えて人間にまで及んだ。

ああ吾が失ひしもの少なからず春のひと日をおろおろすこす

井上萬里子

久し振りに雑誌に戻って来た井上萬里子さん。心よりうれしく思います。病を克服なさったその努力に、心より称賛を送りたい。上句の吾が失ひしもの少なからずは、抽象的で分かり辛いかもしれないが、病は色々なものを失なわしめる。肉体的精神的に。しかし克服する事によって又新しい何かを獲得出来たはず。おろおろ過ごす日からきつと静かな情熱が生まれているに違いないと確信している。

夫と息子^この盃傾けよもやまの話ほのぼの除夜の鐘鳴る

上田やい子

私は父と一緒に酒を飲んだ経験が無い。父と一緒に住んだのは六歳くらいまで。成人した後と一緒に暮す事は無かった。拔芳歌を読んで、私は自分が失ったもの、経験出来なかった事の無念さに涙が流れた。息子とは酒と一緒に父とどんな話をするものなのだろうか。きつとこの親子は仲が良く、心が通い合っているのであろう。そしてそれを見ている母親であり妻である作者の目のやさしいさと心の温もり。私の母はこんな心優しい日を経験せずに死んだ。人は与えられた運命を甘受してしか生きられないものと実感した。

作歌の目・作歌の技法(第六十四回)

作歌の技法(長歌編・2)

三木 勝

長歌の基歌もとうたの最後の部分や反歌を一首独立の短歌としてみる時、その独立性は弱く、一首としては立つことはできない。しかし長歌の中では力を持つ。それは、なぜであろうか。

①ひたすらに安らかに航海と荒磯岬岩間に佇ちておろがみまつる

②をだまきも返るときけど人の世の今日は昨日に還るすべなく

右の二首を短歌として見た時、①では、どのような航海であるのか具体的な叙事がないので、どのような内容・気持ちでおろがむのか、その作者の気持ち・内容に入り込んで、作者と深く共鳴することができない。②では、「おだまきも」の「も」を使うことの必然性が、やや弱い。それは、これを描く以前の状況が、見えないからである。

栄えあれ太陽の舟歌

伊藤英一

草も木も蒼綻び野に山に緑萌えたち新しきやはき芽ぶきの句へるも弥生の月の人心昨日に変わる雪の朝霜の終夜よすがらこえつるも思い出のみを胸に抱き燃ゆる想ひを山川に訣別わかれれ告げ得てかれゆくは弥生の空に咲く花の一夜に様態ようたいの変わるごと儚き夢と彫る心なじみ久しきともがらと心のひだのすみずみに侘しき想ひ刻まれて蜚の光闇のよに消えて寂しき想ひ出はあななつ

かしき太陽のかのいくとせにありしかどひとり佇む夕陽かけ胸内に熱き想ひ秘め眼裏につゆの滾るるを世の常なれば別れこそけふと待ちたる人さえも言の葉もなく永い旅旅だちたまふ事もありましてあゆみも右左まろぶあやふ耐へる身は別れもひそとのびかに消ぬべきなれと思ひきめ心痛めど吾が想ひ人にこそあれ悲しくも本意なき訣別れこの想ひ太陽の舟永劫に耀はいてあれ歌声の楽しく弾みて波やほぎ帆に風うけてひたすらに安らかに航海と荒磯岬岩間に佇ちておろがみまつる

反歌

をだまきも返るときけど人の世の今日は昨日に還るすべなく

基歌のほとんどは叙事である。この長歌での基歌は弥生の季節の叙事から心象へと入り込み最後に作者の主情へと昇華して、作者の意志を表明している。長歌を読むと叙事を踏まえて主情が出てくることが明確に分かる。つまり感動の切っ掛けが明確に語られるのである。感動の切っ掛けと感動を構成する主情の関係が長歌では明確に分かる。長歌を通して、客体と主体の関係を構造的に把握することを学ぶことができる。つまり客体にある客情と主体にある主情とが、離れがたく結びついていることを学ぶことができる。これは、短歌を一首読むうえで、極めて大切な視点・技法である。基歌の全体を踏まえて、反歌を読む。短歌では基歌が語る感動の切っ掛け・叙事を五七五の起承の部分で語らなくてはならない。そして転結の七七で主情を歌う。

第十二回太陽の舟短歌会全国大会

ようこそ栃木・塩原へ

月の舟支部は、維持会員十名、購読会員三名からなっている支部です。宇都宮で生まれた支部ですが、会員のその後の生活環境の変化によって、転居などにより、東京・小田原・大阪と会員は全国にうすく広く散在するようになって来ました。一時期は、宇都宮を中心としていたアララギの支部の方々が、事情があって、太陽の舟短歌会宇都宮支部に合流してくださり支部会員は増加を見たのですが、歳月とともに少しずつ減少してまいりました。しかし今大会の準備・運営を通して支部会員の仲間意識を更に増し、支部の強化発展を図っていきたいと思っております。

平成十六年第六回全国大会は、奥日光でしたが、その時の大会幹事支部は、柏支部（支部長・多久和玲子）でした。それ以来のふたたびの栃木です。月の舟支部は太陽の舟短歌会の会員・仲間の皆さんを再び栃木にお招きできることをうれしく光栄に思っております。第六回大会の会計・問い合わせ先の担当者は藤沢の都野澄子会員（渋谷支部）でした。今はなき都野会員の御志を受け継いで稔りある大会にしたいと心がけております。またその時の詠草のとりまとめのご担当は土屋道子会員（渋谷支部）でした。土屋会員のお体の具合は、いかばかりかと案じておりますが、お会いできることを楽しみにしております。

大会一日目、六月二十七日は、十一時JR那須塩原駅集合、十一時十五分一同、バスに乗って観光への出発です。まずは、

林檎庵というところで、お食事です。腹ごしらえができたところで、郷土資料館・からくり時計・回顧の吊り橋・妙雲寺と巡り、十五時に由緒ある旅館、四百年の歴史を持つ明賀屋本館に到着です。川村・相羽にとっては、戦死した兄と出征前に訪れた思い出の旅館でもあります。

郷土資料館は、建物そのものを展示物としていて江戸時代末期から昭和初期頃までの民具や資料を展示しています。懐かしい思いとともに、良いお歌が生れることでしょう。

からくり時計は、最新鋭のテクノロジーにより時報とともにからくり時計が動き出します。お楽しみに。時間的には十三時の時報が楽しめます。

回顧の吊り橋は、橋の下の深く切れ込んだ箒川の溪谷美を四季折々に美しく見せます。良いお歌を一首お詠みください。妙雲寺は、「文学の森」とも称され、夏目漱石などの文学碑が立ち並んでいます。お楽しみに。

雨天の場合は、後半を変更して、塩原温泉ビクターセンターをおとずれ、可動式の地形模型「温泉ジオラマ」等により塩原温泉の湧出メカニズムを楽しみます。

月の舟支部一同、お待ちしております。

大会実行委員長
実行委員長代行
実行委員会事務局長

川村 貴美
松本 昭子
伊藤 モト

歌会報告

本部歌会 3月例会(第361回)

(北川記)

日時 3月13日(土) 13時〜16時45分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 29名 出詠 30首

司会 生稲進同人

この日だけは桜の時期を飛び越え、風薫る季節の暖かさの中で、熱気溢れる歌会が行なわれました。

・崑崙八仙の群舞ののちに見えくるはなは死に切れぬ者たちの顔 「天山離離(雁の塔・地底の泉)」

代表の解説 崑崙八仙とは皇帝の徳を慕って降りてきた八人の仙人が舞ったに由来する。しかし土に生き土に死んでいった農民の死を乗り越えて地下宮殿は造られた。先生が華清池から白馬寺へ行かれた途上その想いの連作の一首である。

今月も代表から副詞の使い方・歌の焦点の当て方・歌の展開の仕方により、歌が生きてくることの指導がありました。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・春の菜はなべてほのかに苦味もち季めぐり来しよろこびつたふ 庄司 久恵

・春一番吹き荒ぶ日に外に干せる息子のYシャツの抗へるさま 志賀 俊子

・でこばこの表皮の蜜柑たわわにて兄眠る墓守るがごとく

松岡 三夫

渋谷支部 支部長/志賀 俊子

(北川記)

日時 3月13日(土) 10時〜12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 7名 出詠 7首

司会 北川 昭

今月の話題になった歌は武田さんの「やり場なき怒り流しつつ野菜洗ふ大鍋に湯のはやくも滾る」で議論の結果、野菜を「菜を」にすることで歌全体の流れが良くなりました。また、山本さんから「見へる」は「見える」「出れば」は「出づる」などの文語文法の説明がありました。好評の一首は中村さんの「海昏め山を覆へる夕靄に落暉刻刻今日を沈める」で、支部詠草には勿体ない出来栄えの歌でした。

今月は山本さんと久しぶりの河野さんの七首詠草について、作者の想いの籠った連作を鑑賞しました。

品川支部 支部長/久保田昭江 (久保田記)

日時 3月18日(木) 13時〜16時

場所 旗の台シルバースセンター

出席 5名 出詠 9首

司会 久保田昭江

当会場改築のため、約半年の間歌会はお休みでした。桜大樹の二本は残り、建物は明るいバリアフリーに改装されました。申し分ない使い心地で会員大喜びです。

新しいメンバーも加わり心強いメダカ会になりました。
・赤を着て黄色も好きと受験子はへサクラサク〜日を待つ

みと言^う 福永 隆子

結句の言^うを、居るにした方が……の意見も出ました。

・一言の挨拶もなく訪ひくれし玄関脇の土筆三本

松本 啓子

大田支部 支部長／庄司 久恵 (山名記)

日時 3月29日(月) 13時～16時30分

場所 大森山王高齢者センター

出席 9名 出詠 10首

司会 山名恒子

桜ちらほらというのに真冬の寒さに戻った日、会計係吉田さんより新年度の計画と提案があり、決定が為された。三木先生から「徒然草」と「作歌の技法」について講義を受け、9首を評し合った。難しい歌については指名されてもパスでさる雰囲気^{おもひ}が欲しいと話合った。

・たゆたへる思惟^{おもひ}捨つべし畳屋の跡地にバツとたんぽぽ咲いた 川村 貴美

技術修得に時間のかかる職人の技も消えてしまったという重層的な感動があり文語口語を交えて成功していると。

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 3月14日(日) 13時～15時

場所 びよんど(男女センター)

出席 8名 出詠 11首

司会 塩田 秋子

水戸の梅まつりの最中、紅白梅を車内より眺むミニ講義は女人短歌の歌人、伝統を重んじた抒情味と堅実な歌風の初井

しづ枝を勉強し歌会に入り、一首つつ丁寧な歌評が交された。

・ホームレスと住居^{すまい}を記^{しる}す新聞歌人親不孝詫^{わづら}びる歌の哀切

長須 正文

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 3月21日(日)

場所 岩間公民館

出詠 11首

司会 塩田 秋子

春の嵐になり、交通機関運転見合わせの為、止むを得ず休会に致しました。

・朝起きて窓を開ければ雪の中黄色い帽子の登校の列

菅谷 孝子

柏支部 支部長／末次 房江 (多久和記)

日時 3月19日(金) 12時30分～15時

場所 アミューゼ柏

出席 7名 出詠 9首

司会 多久和玲子

柏の街はこぶしの白が際立ち又早咲きの桜の花もちらほらのお天気でした。三木先生にお出で頂き、「作歌の目」「作歌の技法」についての御講義と個々の歌についての丁寧な御指導をいただきました。いつもより少ない人数でしたが時間一杯質問がつづきました。

・老い人の施設にはなやぐ雖^いび笑むを忘れし人らがみつむ

玉川 愛子

・散りしきし梅の花弁^{はなづら}路地の朝胸はりてゆく我の花道

千葉支部 支部長／照山 好子

多久和玲子
(八代記)

日時 3月20日(土) 13時30分～16時

場所 穴川コミュニティセンター

出席 11名 出詠 14首

司会 森五貴雄

3月19日、千葉支部会員の堀井英範さんが加療中逝去されました。昨年夏の一宮全国大会に参加され、月例会の出席を楽しみに歌を詠まれていらっしゃいました。3日前に詠まれた歌が辞世句となっていました。

・我を介護三度の食事に立ち上がり優しき支え妻ありがたし胸に沁みる歌でした。

一同黙祷を捧げ御冥福をお祈りしました。歌会は彼岸入りのせいか欠席者の多い日でしたが、一首一首丁寧に意見交換を致しました。

高得点歌

・「希望校合格しました」孫よりのメール絵文字の跳ねて踊れり
渡辺 幸子

お詫びと訂正 (二月号)

30頁下段21行目 花ならば↓花なくば

計 報

堀井英範会員が3月19日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

太陽の舟短歌会

堀井英範さんを悼む

吉田 昌夫

堀井英範さんに初めて会ったのは四年前の夏だったろうか。千葉支部の例会に、初めて出席し、隣あわせたのが堀井さん。堀井さんも「太陽の舟」に入会したばかりとか、親しく話しかけていただいた。とても初心者とは思えない詠み振りで舌を巻いた。歌会が終わって、暑氣払いということとで、「マダム・チャン」へ皆で出かけた。そのころ既に病を得ていたのであるが、その元気なこと。カラオケが始ると、独壇場。ああ、あの英範さんはもういない。

堀井英範氏遺歌十五首

(照山好子選)

- ・木枯しに群なすすすきの穂の波は寂しきはなしたくましくあり
- ・久々に腕によりかけブリ雑煮元旦帰郷の子等に振舞う
- ・キーボード右手一指で操れどワードの文の仕上がりは良し
- ・オオタカ舞う多摩丘陵の開発の罪を知りつつ青写真描く
- ・入院の日取り告げられ天仰ぐ帰路の車窓に桜花舞う
- ・かたかたと夜半の病棟トイレ行く酸素ボンベの車輪のきしみ
- ・肺病みて緑まぶしき退院日一呼吸ごとの空気の旨し
- ・ああそうと気のない返事に怒る妻話題途切れし二人のディナー
- ・カニニューラに束縛された長き冬炬燵に籠り春暖を待つ
- ・宴終えて安堵と寂しさ残りけり末娘の幸せただ祈るのみ
- ・東より昇りて西へ永遠の光り我が身を乗せし太陽の舟
- ・番小屋のすきま吹きいる風の音知床うたう森繁のごと
- ・屈伸も徒歩も叶わずなになすや洗面鏡のわが身に問いぬ
- ・息止まる悪夢の覚めて寝汗床おもわずまざるコールのボタン